

【 会員投稿 】 ピケティの『21 世紀の資本論』とビアスの『悪魔の辞典』の紹介(上)

鳥取市 高橋正晨

フランスを代表する経済学者のトマ・ピケティが『21 世紀の資本論』という 700 頁、厚さ5センチの大著を出し、フランスとアメリカでベストセラーになっています。明らかにマルクスの『資本論』を意識して書かれたものようです。

大変勉強になると思われますので、元慶應義塾大学教授赤木昭夫さんの雑誌 世界 2014 年8月号に掲載された「ピケティ・パニック『21 世紀の資本論』は予告する」の要点をご紹介します。

15 年間にわたって一貫してピケティは、盟友のアトキンソン(英オックスフォード大)やサエズ(カリフォルニア州立大)たちとともに、国際的な新進気鋭の研究者の協カネットワークを組織し、介在の総体は「資本と収入との関係」を中心に分析すべきと狙いを定め、データの集積と検討に努め、結果を本書に纏めています。古くは 17 世紀から、広くは日本も含め 20 を超える国々から、資本と収入(税金)のデータを集め、エクセルによる WTID(ワールド・トップ・インカムズ・データベース)を構築し、研究のために公開しています。

マルクスはデータよりも理論にたよって結論を導くのに急で、無限の資本の蓄積、そのための競争による利子率の低下、それを埋めるための搾取の強化、労働者の決起へと歴史の筋道を説いています。利子率の低下は結果的に誤りであったと、ピケティは明言しています。

『21 世紀の資本論』でピケティが指摘したことを纏めると、次のようです。

① 格差の激化で深まる右傾化

富裕層はいよいよ富み、貧困層はいよいよ貧しくなり、不平等が重大化してきた。だが、まだ多数を占める貧困層が、変革を叫んで立ち上がるには至らない。その前段階が右傾化である。主導するのは、体制の巨悪をはぐらかされ、浮かばれないのは下層救済の負担のためと思ひこまれた中間層であり、彼らは変革よりも旧態の安穩を求める。それにたいし彼らの意を迎えようと、保守もどきの政権がポピュリズムへ傾き、行き詰まれば、ファシズムを呼び込みかねない。

ふりかえると、2014 年前半の日本を含め世界の主なニュースは、右傾化がらみであったと総括される。

② 21 世紀末の世界を予告する

重大な政治的反作用がなく、金融の地球化が続けば、2100 年には、資産保有者が一方的に富み、不平等が現在よりも激化する。第一に資産に対する税引き後の利率は4パーセント強が続くからである。第二に(資産の大きさの尺度になる収入、その伸びに相当する)経済の年成長率は、現在の3パーセントから半分の1.5パーセントに低下するからである。第一の要因と第二の要因の差がますます広がり、不平等を強める。いずれも世界的にならした数値である。

第一については、利率は必然ではなく、長期的には、歴史的な社会的な政治的な力関係で決定されるためである。これからも国際的規制が弱く金融工学が幅を利かす現在の状態が続く、利率が相変わらず操作され高く保たれるからである。第二については、もっぱら(収入すなわち経済成長で重きを占める先進国)人口減少のためであり、さらに技術の停滞も作用するからである。

ピケティの自説にたいする確信は何に基づくのか。第一に、歴史的事実である資産と収入のデータから出発する。第二に、

それらを縦横に検討することを通じて、わかりやすく、かつ決定的な資産と収入の関係を見出す。第三に、関係の推移から、関係の推移の原理、それから派生する法則を引き出す。第四に、それらによって歴史的経過が説明できるかどうかを確かめる。その上で第五に、法則に従って将来の推移を予測する。

第一から第四までを、時代や地域を変えて、いく通りも検討を重ね、方法が正しく有効かを確かめる。一例として、仏英・米・日について、資産の大きさの指数としての収入との比、つまり、それぞれの国の総資産をGDPで割った値の変化に注目する。資産が収入の何倍であったかという関係の推移が、そこに端的に顕れる。

国名	1910~30年	1950~60	1990~
仏英	7倍	3	6
米	5	4	4.5
日	6~7	2~3	6~7

「利益率(r)は常に成長率(g)より大である」を法則として定立する(ピケティの第二法則 $r > g$)。

この捉えやすい二つの変数の関係のみから 21 世紀の後半の富の不平等を予告できるのである。

③ 世界経済に停滞の兆候

ピケティが予告する21世紀末の暗さ、経済的な不平等のための民主主義の後退、社会階層の流動性(ソーシャル・モビリティ)の低下、意欲喪失による競争の不振などの兆候は、すでに経済停滞(スタグネーション)として、ごく最近まで好調と思われてきたドイツ、中国、オーストラリアでもうかがわれる。しかし停滞はこれら三か国に限られない。

日本のアベノミックスは、庶民にとっては、円安、石油などの値上がり、増税でインフレ、かつ収入は伸びず、デフレ脱却どころか、厄介なスタグフレーションと化しつつある。

④ 世界共通資産税の提案

世界を暗くする富の集中による不平等の激化を防ぐため、ピケティは世界共通の資産税を提案する。20 世紀の発明は社会民主制と累進課税による富の再分配であったが、20 世紀の最後の 20 年間にそれが覆されたので、立ちなおさせるため、21 世紀には少なくとも世界共通資産税によって富の再分配を志向するのが当然なのである。

それに逆行するのがタックス・ヘイヴンや投資を呼び込もうとする企業減税に他ならない。日本の財界や現政権はそうした逆行に加担する。脱税と節税をどこかが許せば、公平な競争は成立しない。だから、世界のどこにも抜け穴がない、世界共通の資産課税が望まれる。

⑤ アメリカ的経済学への批判

視野を広くして歴史的に見通し、斬新で啓示的な洞察を得る。これがピケティの学風である。

それとは対照的に最近のアメリカの経済学に対して、ピケティは、「歴史的研究を犠牲にしての、数学、そしてただ理論的な、しばしば高度にイデオロギー的なスペキュレーションにたいする、子供じみた情熱を克服しなければならない」ときびしく批判する。

< 次号に続く >

【 会員投稿 】 ピケティの『21 世紀の資本論』とビアスの『悪魔の辞典』の紹介(下)

鳥取市 高橋正晨

次に 20 世紀初めの頃、来るべき 20 世紀の文明を信用していなかったアメリカの短篇小説家であったアンブローズ・ビアスの『悪魔の辞典』を、岩波文庫のビアス著 西川正身編訳 新編『悪魔の辞典』によって、ご紹介させていただきます。

1906 年には、ビアスの筆に成る『冷笑家用語集』と、1911 年には、『悪魔の辞典』を、1967 年にはアリソナ州立大学名誉教授アーネスト・ジエローム・ホプキンズの編著に成る『増補版 悪魔の辞典』が出されています。この三冊の辞典の中から、西川正身氏が独断と僻見を尺度として然るべき見出し語を自由に選び出して訳出したものが、この新編『悪魔の辞典』です。

悪魔である人間がどんなものであるのかを、ビアスは 1881 年ごろから週刊誌に寄稿し始めて、政治・経済、法律、宗教、戦争、文学、女性、人間性、言語、神話その他について取り上げ、簡潔で機知に富んだ定義を下しながら、それぞれの対象に鋭い風刺を加えています。彼は、その物事の外見とその真の姿とを仮象と実在とを見分ける鋭い目をもって定義しています。20 世紀の文明の「満足」が疑わしくなってくると、今日でも、時と場所を越えて、『悪魔の辞典』は最も引用される書物の一つになりました。

言葉を疑わぬ人には、『悪魔の辞典』は、疑わしい言葉とはどういう言葉かを知るための字引きですが、言葉を信じない人には、信じられる言葉とはどういう言葉かを知るための字引きです。

念のため『広辞苑』と全語比較してみました。残念ながら、広辞苑では人間が使っている言葉の外見は分かりますが、真の姿、本当の意味は分かりませんでした。

以下意味深長な言葉を紹介させていただきます。今日の右傾化の時代に変な勉強をさせてもらったように思えてなりません。日本は、安倍政権の下でどうなってしまうのでしょうか？

悪魔…われわれ人間のあらゆる災いを創始した者、この世のあらゆる良きものを所有する者。

人間…自分の心に描くおのれの姿に恍惚として眺め入っているために、当然あるべきおのれの姿が目に入らない動物。

財産…物質的なものであれば、どのようなものであれ、たとい特別の価値のない場合であってもやはりそうなのであって、それを我がものにしてAなる者が、Bなる者が食欲にも奪い取ろうとするのに対して、手放すまいとしてあくまでもこれを守ろうとするもの。

労働…A なる者がBなる者のために財産を獲得してやる方法の一つ。

会社…個々の人びとが、責任を伴わないで、それぞれ自己の利益を上げ得るように工夫された巧みな仕掛け。

自由…想像力の所有物の中で最も貴重なものの一つ。

権利…あるものである、あることをする。あるいはあるものを持つ正当な機能。

義務…欲望の線に沿って、利益の方向へと、われわれをきびしく駆り立てるもの。

責任…自分の肩から取り下ろして、神なり運命なり宿命なり廻り合わせなり、あるいは隣人なりの肩へ容易に移すことのできる重荷。

民主国家…理論上は活動しているはずであるのに、実はたま

たま有能であるにすぎない、数限りない政治的寄生虫によって運営されている行政上の統一体。

政治…主義主張の争いという美名のかげに正体を隠している利害関係の衝突。

内閣…誤った政治を行うように委託されたきわめて重要な連中だが、その委託は十分な根拠があるのが普通である。

大臣…その権限はかなり大きなものがあるが、責任の比較的軽い一種の事務官。

国会…法律を廃止するために会合を持つ人びとの集団。

法律家…法律の裏をかく技術に熟練している者。

経済…要りもしない一樽分のウイスキーを、買うだけの余裕のない牝牛一頭分の値段を払いまでして買い入れること

財政…歳入および資源を、管理者自身の最大の利益になるように管理する技術ないし理論。

外交…祖国のために偽りを言う愛国的な技術。

教育…それぞれが理解力に欠けていることを、賢者に対してはこれを明らかにし、愚者に対してはこれを隠して見せないようにするもの。

改革…何かある運動の宣伝に使われる幻灯用のスライド。

同盟…国際政治において、お互いに自分の手を相手のポケットに深く差し入れているため、単独では第三者のものを盗むことができないようになっている二人の盗人の結びつき。

戦争…平和の策略が生み出す副産物。

平和…国際関係について、二つの戦争の期間の間に介在するだまし合いの時期を指して言う。

戦闘…舌ではいくらやっても言うことをきこうとしない政治関係の結び目を、歯でもってほどいてみせる方法。

侵略…愛国者が、おのれの抱く祖国愛を証拠立てるために用いる、最も広く世に認められている方法。

保守主義者…現存する弊害を新たな弊害をもって代えたいと願う自由主義者に対して、現存する弊害に魅せられている政治家のこと。

愛国心…自分の名声を明るく輝かしいものにしたい野心を持った者が、たいまつを近づけると、じきに燃え出す可燃性の屑物。

野心…生きている間は敵から悪しざまに言われ、死んでからは味方の者から物笑いにされたいという、抑えようにも抑えることのできない激しい欲望。

無謀な…他人の与える忠告の価値に無頓着な。

雄弁…白とは白であるように見える色を指すと、愚かな違中に口を使って思いこませる技術。

よく嘘をつく…盛んに美辞麗句を弄する。

いんちき…政治屋の言明、一言で言えば、この世の中。

欺瞞…政治的権力の基礎。

大胆不敵…安全無事な立場にある人に見られる最も著しい特質の一つ。

大衆…法律制定の諸問題で無視して差支えない要素。

独裁者…無政府状態なる疫病よりも、専制政治なる悪役のほうを選ぶ一国の長。